

# 宝寿の風

第10号  
発行者  
宝寿院住職  
田辺信雄  
TEL62-5739

いじめごわい

宝寿院住職 田辺信雄

檀家のみなさまには、日頃より宝寿院ならびに宗門の護持発展のために、ご理解とご協力をいただきありがとうございます。さて、今年は平成最後の年であり、五月からは新元号の令和に改まります。



ところで、これからは「こころの時代」だと言われて久しいですが、平成時代を顧みると、現実にはむしろ逆方向に流れているように感じられてなりません。

いじめによる自殺、親による子どもの虐待死、無職の子による親の殺害、悪質な詐欺事件の増加など、信じられない事件が後を絶たず、心が痛むばかりです。

今こそ、お釈迦さまの教えの原点に立ち返り、人間らしい心を取り戻さなければならぬと思います。

来たる新時代が、正しく「こころの時代」となるよう願って止みません。 合掌

## 庚申堂に休屋を建設中

昨年は、庚申堂の本尊の建立からちょうど300年、現庚申堂建立から120年の節目に当たったことから、庚申堂境内を整備いたしました。

今年はこの庚申堂の西側に、小さいながら参詣者用の休屋を建設いたします。

四月中には完成の予定ですが、休屋は、四国の八十八か所霊場を巡るお遍路さんを対象にした、地元住民による無料休息所を参考にしています。



そこには、昔から、年配の人たちを中心に、湯茶やお茶菓子を無料で提供する「お接待」というすばらしい風習が残っています。

庚申堂の休屋は、このような考え方から、庚申さまを詣でた人たちだけでなく、散歩している人たちへの、一休み休憩所としての提供も考えています。

ただ、接待する人をどう確保するかという課題もありますので、少しずつ進めていければと思っています。

宝寿院の年中行事①

七月 尉兼明神輿渡御  
いけんみょうじんみこしときよ



摩訶不思議なおはなし 第五話

あれは多分、私が四歳くらいの時のことだと思えますが、とても不思議な体験をしました。今でも鮮明に覚えています。

そのころの私は、まだ小さかったので、毎晩寝る時間になると、母に手を引かれて寝床のある部屋へ連れて行かれていました。部屋に入ると右側にタンスがあり、そのタンスの上を見ると、決まって30センチくらいの小さな女の子が私の方を見ていました。

可愛い眼差しで、ただじっと私を見つめているだけのこともあれば、タンスの端から端まで、踊るように行ったり来たりしていることもありました。また、タンスの端から足をぶらさげて腰掛けていることもありました。

なぜか母は、その子に気付いてないようでしたが、私は私で、見るもの聞くもの不思議なものばかりの幼子でしたから、とりたてて母に、それが何なのかを聞きもしませんでした。

その体験はずっと気になっていて、中学生の時になって、初めて母にその話をしましたが、まったく信じてもらえませんでした。

今でも不思議でなりません。もしかして、あれが座敷わらしというものだったのかもしれないと思っています。

住職体験談

平成三十一・令和元年年回表

一周忌	平成三十年
三回忌	平成二十九年
七回忌	平成二十五年
十三回忌	平成十九年
十七回忌	平成十五年
二十三回忌	平成九年
二十五回忌	平成七年
二十七回忌	平成五年
三十三回忌	昭和六十二年
三十七回忌	昭和五十八年
四十三回忌	昭和五十二年
四十七回忌	昭和四十八年
五十回忌	昭和四十五年
百回忌	大正九年

※法要の申し込みはお早めにお願ひします

平成三十年度 寄進者ご芳名

昨年度中に檀信徒の方々より、ありがとうございました。ご寄進を頂きました。

- 一、鰐口一基 坂本 陽様
- 一、香炉一基 坂本昌司様

山門左側の毘沙門堂や懐古庵の不動堂には、お詣りに来た人が鳴らす丸い形をした鰐口（わにぐち）がありますが、この度、山王の庚申堂が整備されたのを記念して、坂本陽様から庚申堂用の鰐口を御寄進頂きました。鰐口は、その音によって魔障を祓うと言われています。

また、この度、護持会役員を退任された坂本昌司様から、お盆の施餓鬼供養など、寺の重要な行事の際に使用される長寸線香用の大型の香炉を御寄進頂きました。末代に至るまで大切に使用させて頂きたいと思ひます。ありがとうございました。

■お悔やみ■

護持会の役員ではありませんでしたが、寄木戸不動尊のお祭りやお堂の管理等にお尽くし頂いた坂本知一様が、昨年十一月に、七十七歳で逝去されました。

生前のご協力に深甚なる感謝の意を表するとともに、ご冥福をお祈りします。

宝寿院護持会役員

- 会長 坂本新一
- 副会長 小沼唯二 坂本勝三
- 会計 三吉靖典
- 役員 清水康司 峯崎 寛
- 襟川栄太郎 峯崎平弥
- 服部次男 田村照美
- 新島克己(新) 坂本雅義(新)

※長い間護持会副会長を務めて頂きました服部和悦氏、ならびに役員を務めて頂いた坂本昌司氏が昨年度を以て退任されました。大変お世話になりました。

### 温故知新⑨ 寄木戸の釈迦堂

宝寿院の本尊は釈迦如来ですが、これは昔からそうなのではなく、開山以来昭和49年迄は聖観世音菩薩（観音様）でした。

本尊を変更した理由は、曹洞宗寺院の本尊として、本来、釈迦如来が望ましいというに加えて、現本尊の釈迦像が、近隣の寺院にはないほど大きく立派であり、お顔立ちを含めた細部の彫刻が秀逸であったことによります。

また、この釈迦像は、元々宝寿院にあったものではなく、以前は、寄木戸長良神社の南にあった釈迦堂に祀られていました。

この釈迦堂は、藁葺・切り妻屋根の建物



でしたが、老朽化していたため、昭和44年頃に解体されました。この釈迦堂も元々は、寄木戸和田地区の小高い丘の上にあった建物で、明治時代に移転したものです。

ちなみに、和田地区の敷地は村人の共有地でしたが、後に、旧大川村に寄進され、更にその後旧大川村と旧小泉町が合併したため大泉町の町有地になりました。その丘は削られて平地となり、今は、みよし第二幼稚園の敷地になっています。

なぜ釈迦堂を移転したのかは不明ですが、かつて古老から聞いた話では、移転の際に釈迦堂は解体せず、建物のまま何十人かで担いで運んだということです。

なお、この釈迦堂は、江戸時代から和田地区にあり、「寮」と呼ばれていて、他所から移ってきた人のための仮の宿泊施設であるとともに、寮坊主と呼ばれる僧が住んでいました。当院の過去帳には、和田山寮坊主とあり、六人の僧名が記載されています。その寮坊主の一人が、ここに釈迦像を安置したようです。

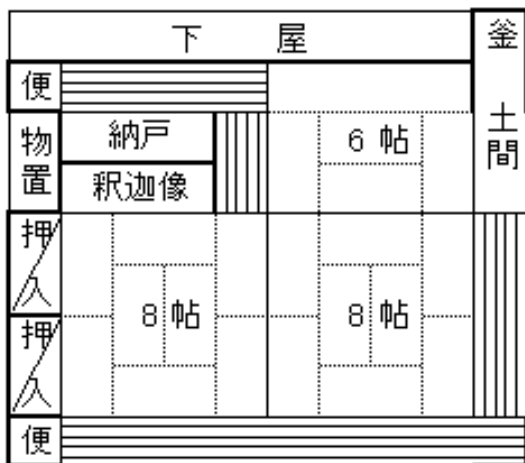
そのことは、この釈迦像胎内の銘板に記されている内容からうかがい知ることができます。銘板の表面には「江戸湯島天神前大仏師 法橋康春 是造」とあり、裏面に

は、「釈迦如来座像一躰建立奉仕 美濃国方県郡東秋沢村 六部平吉」とあります。

この六部というのは苗字ではなく、正しくは六十六部と言ひ、全国六十六カ国の霊地を巡り歩いた巡礼者・行者のことで、仏像を入れた厨子を背負って鉦や鈴を鳴らし、米銭を請い歩いた者のことです。

古老の話からも、寮坊主は、同じように、寄木戸村内や近隣地域の家々を回り、浄財を頂いて生活していたということです。

なお、この釈迦像は損傷が激しかったため、平成18年に本格的な修復を行い、現在に至っています。また、釈迦堂の間取り図は、今民雄氏の記憶の元に作成しました。



釈迦堂間取り図